



Title	巻頭言：人生プロセスにおける新型コロナウィルスの影響
Author(s)	佐藤, 真一
Citation	生老病死の行動科学. 2021, 25, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83191
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

卷頭言

人生プロセスにおける新型コロナウィルスの影響

The impact of COVID -19 on the life process

佐藤真一

2020年度の本誌巻頭言には、コロナ禍について触れないわけにはいきません。昨年の巻頭言では、開催されるはずだった東京オリンピックに触れています。延期ということになっていますが、2021年2月上旬の現時点では開催するかどうかは決まっていません。

コロナの影響は、大学関係だけをみても、入学式は中止、授業はリモート中心で、教養の大人数講義がほとんどの新入生は通学ができず、友だちづくりもサークル活動への参加もできていません。私たちの研究室の卒業研究では、実験や調査の対象となる高齢者に会うことができず、Web調査を少しできた程度でしたから、学生は論文にまとめるのに苦労していました。卒業旅行も難しい状況です。私たち教員は、学会や会議はすべてリモート開催か延期。中止された学会もありました。チェコのプラハで開催が予定されていた国際心理学会とアルゼンチンのブエノスアイレスで開催が予定されていた国際老年学会も延期となりましたが、近々の開催では参加者が限られてしまうことでしょう。また、授業やゼミもリモート。研究はできたとしてもWeb調査に限られてしまい、高齢者には会うことも儘なりません。そのような中、昨年9月に大阪大学会館で開催したシンポジウムは、会場参加者を極端に少なくして、YouTubeでの配信を同時に使うハイブリット型で実施しましたが、会場参加可能人数を超える方々がリモートで視聴してくださいました。新たな情報発信の仕方を体験することができたのは、貴重な体験となりました。

大学生活の記憶は、人生にとってとても貴重で大切なことを、年長者である私たち教員は良く知っています。その大事な時間を奪われてしまった学生たちの無念をどのようにすれば別の形に置き換えることができるのかは、とても難しいことです。

オリンピックや大学生活だけでなく、新型コロナウィルス、WHOの命名によるCOVID-19のパンデミックは、世界中のすべての人々をあらゆる弊害の「当事者」にしました。大規模災害や戦争などでも、当事者になるのは世界中の一部の人々ですから、今回のコロナ禍は、人類の歴史上でも特筆されるべき出来事です。このような出来事に遭遇するとは、まったくの想定外です。しかし、想定外のこと、「なんでやねん」が起きるのは人生の常でもあります。それにいかに対応するかに、人々の知恵と叡智が試されているのだろうと思います。

高齢者は新型コロナウィルス感染によって症状が重症化するリスクが高いと考えられています。特に基礎疾患があると重症化の可能性が高いため、介護施設を利用している高齢者は特に危険です。同じ当事者といえども、命に直結する危険性という意味での当事者性は高齢者に特に高いということは見逃せません。同時に、高齢者とともに暮らす家族や、医療・介護にあたる職員の、高齢者を介した当事者性も高いといえます。新型コロナウィルス蔓延初期は、特に米国の高齢者介護施設でのクラスター発生が注目されました。一方で、我が国の介護施設でのクラスター発生は稀でした。しかし、冬季の感染者増大に伴って、施設の感染予防の努力を超える感染力を發揮したウイルスによって、急速に高齢者施設でも罹患者が増

えてきたとのことです。施設に感染者が出れば、すぐにもクラスターになってしまいます。要介護高齢者とその関係者の当事者性は、極めて深刻と言わざるを得ません。

一方、若者がほとんどの大学生の当事者性はどうでしょうか？ 命にかかわる当事者性こそ低いものの、前述のように貴重な大学生活、期待していた大学生活が一変してしまうという意味での当事者性は、やはり深刻です。教員である私たちができるることはそれほど多くはありません。なぜならば、大学生活の重要性は、カリキュラムや行事などの表に現れる部分はほんの一部に過ぎず、教員の目からは隠された友人との会話や議論、サークル活動、アルバイトなどの学生生活の日常が多くを占めるからです。教員としてこれほどの無力感を感じることはありました。私には、学生一人ひとりの健康を見守ることしかできません。

生涯発達心理学を提唱したことで知られる P. B. Baltes は、人生に対する相対的な影響力を「標準年齢的影響（年齢効果）」、「標準歴史的影響（コホート効果、世代効果）」、「非標準的影響（ライフイベント効果）」の3側面の比較から検討することを提唱しました。新型コロナウィルスの影響をこの3側面から検討すると、年齢効果は生理的な影響力によって左右されることを考慮すれば、年齢に伴って高くなることが予想されます。一般的には年齢効果は児童期に最も高く、青年期、成人期には低く、高齢期に再び高まる U 字型を示しますが、今回の新型コロナの危険性は、通常のウィルスと異なって低年齢で極めて低いことから、一般理論による予想とは異なっています。

世代効果は、一般的には青年期に最も高い影響力を持つ山型を示しますが、世代によってその影響の内容が異なります。コロナ禍は、青年世代では生活の自由を制限されることへの影響、成人世代では仕事に関する影響、高齢世代では生命にかかわる影響が問題になり、児童期は親世代との関係性からの影響を受けています。今回も青年世代は政府や自治体の行動制限に不満を持っていることが報道されています。欧米では、若い世代を中心に抵抗運動さえ起きています。やはり青年世代に属する人々にとっては、標準歴史的影響が相対的に大きいといえるでしょう。

ライフイベント効果は年齢とともに影響力が増すと考えられています。ライフイベントは人々に個別的に影響を与えますから、感染者と非感染者では異なるライフイベントとして体験されまし、感染者が出た家族とそうでない家族でも異なるイベントとして意識されます。また、大学の新入生と卒業生では異なる内容の影響を受けていると考えられます。しかし、個人に対する相対的な影響力としては、高齢になるほど受動的にならざるを得ないという点で、深刻な影響を受けてしまうでしょう。

このような体験は、アフター・コロナでも影響力を持つと思われます。新型コロナウィルスの影響力は心理学の様々な面から検討されていますが、生涯発達心理学では、年齢および世代別の影響力、個人的な影響力をそれぞれ比較、検討することと同時に、今後の各世代、各個人の人生への影響力を観察し続ける必要があると考えています。

「生老病死の行動科学」第25巻をお届けします。インターネット上の公開もしていますので、そちらもご覧いただければ幸いです。

大阪大学学術情報庫(OUKA) <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

また、当研究室のホームページからもご覧いただけます。

臨床死生医学・老年行動学研究室 <http://rinro.hus.osaka-u.ac.jp/>